遊戯王～受け継がれる光《イシ》～

一般兵 高天原 A

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
遊戯王～受け継がれる光（イシ）～

【Ｎコード】
Ｎ７０７７Ｍ

【作者名】
一般兵　高天原　Ａ

【あらすじ】
次の時代に受け継がれた光はどの様な輝きを見せるのか．．
★は決闘ありです！

【遊覇編：プロローグ】（前書き）

懲りずに新作投稿。

興味がある方は覗いてみて下さい。

【遊覇編：プロローグ】

「はい。　今着きました。」

少年が携帯電話を片手に駅の入り口から出てくる。

髪は黒く、肩に少しかかるくらいの長さ。

所々毛先が跳ねており、襟足を短めに縛っている。

「はい、今童実野駅の南口にいます。」

電話をしながら、徐(おもむろ)に、背負っているリュックから地図を取り出し眺める。

「はい。　ココから直ぐの所ですね。　分かりました。」

地図をリュックに仕舞い歩き出す少年。

「はい。　大丈夫ですよ師匠。　はい。　じゃあ僕はこれで。」

そう言うと電話を切り、ソレをポケットに仕舞うと、「ふぅ」と息を吐き今電話をしていた相手を思う。

自分の憧れであり同時に目標でもある師匠。

未だ遠くに及ばないが、何時かは越えたい存在。

そしてこれから向かう場所はその足掛かりになる大事な場所。

そうこうしている内に一軒の古いオモチャ屋に着いた。

看板の字も辛うじて読めるくらいの状態。
そっとドアを開ける。
するとチリンとベルが鳴り店に来客の合図を送る。
店の中は静かで、辺りを見回しても人の気配が全くしない。
「すいませーん。　誰か居ませんか～？」
声だけが虚しく木霊し、全く返事はない。
「おっかしいなぁ。　此処で間違いない筈なんだけどなぁ？」
途方に暮れ、考え込む少年の後ろに近づく影。
「仕方ない。一度出直すか。」
考えが纏まり、外に出ようと少年が振り向くと、其処にはエイリアンが立っていた。
「ぎゃゃゃゃゃ！？」
驚き悲鳴を上げる少年。
よく見るとエイリアンは作り物の仮面を被った小柄な人間だった。
「ホッホッホ。　ナイスなリアクションじゃ。」
「ハァハァ。　驚かさないで下さいよ！　心臓に悪いじゃないですか！！！」

胸に手を当てながら、少年が言うと被っていた仮面を脱ぎ出す。
被り物を脱いで現れたのは小柄な老人だった。

「すまんすまん。　見知らぬ顔じゃったからな、ついつい驚かせてみたくなっての。」

悪びれもせず、サラリと言う老人に少年はため息を吐(つ)き、昔師匠に言われた事を思い返していた。

（そう言えば師匠が、悪戯好きで子供みたいな人だから気をつけろって言ってたっけ？）

今更忠告を思い出したが後の祭りである。
少年は、服の埃を払いながら立ち上がった。

「して、君は誰かな？」

老人の問い掛けに対して、少年は気を取り直して自己紹介を始めた。

「僕の名前は氷室遊覇(ひむろゆうは)と言います。　師匠――武藤遊戯さんの紹介でバトルシティへの参加の申し込みをしに来ました。」

今此処に、新たなる伝説の幕が切って落とされた。

【遊覇編：プロローグ】（後書き）

如何でしたでしょうか？

楽しんでもらえたなら幸いですW

【遊覇編：一話】（前書き）

色々勝手に盛りましたW

なんだそりゃ！？と思われるかも知れませんがご了承下さい。

【遊覇編：一話】

「待たせたの遊覇君。　バトルシティへの参加申し込み完了じゃ。」

老人とは思えぬ手捌きでパソコンを扱うと、素早く申し込みを終わらした。

「ありがとうございます。」

遊覇は双六に礼を言い決闘盤（デュエルディスク）を受け取る。

バトルシティ参加者の決闘盤（デュエルディスク）には、一般人と参加者の区別をつけるために参加申し込みをした店舗で登録されるようになっている。

登録をすると近くの決闘者（デュエリスト）を感知するシステムなどが使えたりする。

当然、登録を行っていない者はシステムは使えず大会にも参加は出来ない。

「それにしても君が遊覇君じゃったとはな。」

双六は椅子から立ち上がると、待っていた遊覇の前まで歩いてゆき、マジマジとその顔を眺めた。

「な、何ですか？　僕の顔に何か？」

急に顔見られ、遊覇は狼狽える。

「何、お主の事を前に遊戯から聞いておっての。」

「えっ？」

双六の突然の言葉に驚く遊覇。

「良く言っておった。　彼は凄い決闘者（デュエリスト）だ。じいちゃんも絶対びっくりする筈だ。とな？」

その言葉を聞き、遊覇は驚きと共に嬉しさを感じる。

まさか自分が其処まで思われていたなどと全く思ってはいなかった。

「そうですか。　師匠はそんな事を…。」

嬉しさが込み上げて自然と微笑む。

（そう、似ておる。　あの眼差し、あの子と同じ決闘者（デュエリスト）の眼をしておる。）

そんな遊覇を見た双六は、その様に考えながら、自分までうれしい気持ちになり、微笑んでいた。

「さて、遊覇君はコレからどうするんじゃ？」

双六の聞いたコレからとは、バトルシティ開幕までの予定の事だった。

「そうですね。　開幕まで一週間ありますからね。　少しこの街を見て回ろうかと…。　何せ初めての場所ですから。」

「そうか。　その方が良いじゃろう。　バトルシティ、文字通りこの街全てが戦場と化す。　地理は把握しといた方が良いじゃろう。」

顎に手を当てウンウンと頷く双六。

双六の言うとおり、街全てが戦場と化すこのバトルシティにおいては、街の地理を把握する事は、非常に重要な事なのだ。

決闘者(デュエリスト)によって、自分の得意な場所(フィールド)がある。

自分の得意な場所(フィールド)に相手を誘い込み、自分に有利な決闘(デュエル)をする。

自分の領域(テリトリー)を持つ決闘者(デュエリスト)も少なくはない。

より効率良く対戦相手を探し、相手を倒すにはそう言った知識も必要になってくる。

「はい。　そこら辺は師匠に教え込まれてますから。」

強いカードを持つだけが、強い決闘者(デュエリスト)では無い。

あらゆる情報を駆使し戦うのが真の決闘者(デュエリスト)なのである。

遊覇も、師匠である遊戯からそう教わり、そう言った情報収集には余念がない。

「じゃあ僕はそろそろ行きますね。」

遊覇は、荷物を背負い直すと、双六に別れを告げる。

「そうか、もう行くのか。」

双六は残念そうに言うと、遊覇を見送る為に、一緒に店の外に出た。

「今日はありがとうございました。」

礼を言い、深く頭を下げる遊覇。

「何、大したことはしとらん。　また来なさい。　困ったことがあったら何時でも来なさい。待っとるよ。」

双六は優しげな雰囲気で遊覇に言った。

「はい。　ありがとうございます。　何かありましたらまた寄らせて頂きます。」

「ウム。　気をつけてな。」

そう言い、手を振る双六と別れ、遊覇は街の方へと歩き出した。

「へぇ〜。　結構広い街なんだなぁ。」

双六と別れてから数時間が経った。

遊覇は色々な店や路地裏等を見て回り、街の地理は　殆ど頭の中に入っていた。

そして、偶々近くにあった公園に入り、休憩をしようと思ったのだった。

「ふぅ。　疲れたなぁ…。流石に歩きっぱなしは堪えるよ。」

そう言い、背中に背負っていたリュックを下ろすと、近くのベンチへと腰を下ろした。

すると、遠くから何やら騒がしい声が聞こえてきた。

「〜〜〜〜！！」

其方を見ると、何やら子供が言い争っているのが見えた。

「はぁ。」

やれやれと思いつつ、遊覇は重い腰を上げると、先ほど見た子供達の所へと足を進めた。

「オイ！遊多！」

少し大柄な少年が、小柄な少年に向かって怒鳴り声を上げる。

「お前みたいな雑魚が持ってても宝の持ち腐れだ。　俺様が使ってやるからそのカードを寄越しな！！」

ずいっと右手を出して遊多と呼ばれた少年へと言った。

「い、イヤだよ。　このカードは父さんから貰った大切なカード何

だ…。」

弱々しい声で反論をするが、その態度が気に障ったのか、大柄な少年は更に声を張り上げ目の前の少年へと詰め寄る。

「良いからさっさと寄越せって言ってんだろ！！」

「やめてよ太君（ふとし）！」

少年へと掴み掛かろうとする太と呼ばれた大柄な少年。

「やめなよ。」

その手が触れようとしたその時、後ろから声がかけられたら。

突然の声に手は止まり大柄な少年は驚いて後ろを振り向く。

其処にいたのは先程このやり取りを見て、近づいてきた遊覇であった。

「！？誰だテメェ！」

突然現れた遊覇に驚き怒声を上げる。

「カードは決闘者（デュエリスト）の命だ。　其れを寄越せは無いよ。」

「アァン？　テメェには関係ぇ無いだろ！」

そう言うと、太は遊覇に掴み掛かろうとした。

しかし遊覇はアッサリと避け、逆に脚を引っ掛けて転ばした。

「ギャッ！」

胸を強く打ち、カエルの潰れたような悲鳴を上げる太。

ヨロヨロと立ち上がると今にも呪い殺せそうな程の勢いをした目で遊覇を睨む。

「チクショウ！！　絶対ぇ許さねえ！？　覚えてろよ！！！」

そう言い捨てると、走って公園から出て行った。

「大丈夫だったかい？」

先程脅されていた少年へと話しかける遊覇。

「あ、あのっ！　助けてくれてありがとうございました！」

そう活きよい良く言って、頭を下げる小柄な少年。

「気にすることは無いよ。　カードは決闘者（デュエリスト）の命だからね。　ああ言う奴らは許せなくて。」

遊覇は、少年が大事そうに持っているカードに目を向ける。

「余程大事なカード何だね？」

「はい。　コレは父さんがくれたカード何です。」

そう言って大事そうにカードを眺める少年。

遊覇は笑顔で目の前の少年へと喋りかける。

「僕は氷室遊覇。　君もデュエルモンスターズをやるのかい？」

遊覇は遊多の持つカードを眺め言った。

「はい。僕は遊多って言います。　まだ全然弱くて負けてばっかりなんです。　だから上手くこのカードも扱えなくて。」

そう言うと、手元のカードに目線を下ろし、しょんぼりと言う遊多。

「落ち込まないで？　君が自分のデッキを信じていれば、必ずカードは応えてくれるよ。　まっこれは師匠の受け売りだけどね。」

そう言って、ハニカむ遊覇。

「うん！　ぼく、諦めないで頑張るよ。　そして、ぼく絶対に決闘者の王（デュエリストキング）になるんだ！」

遊多は力強くハッキリと応え、手にしたカードに目を移すと、さっき迄とは違う光（イシ）の灯った瞳で遊覇を見た。

「そっか…。じゃあその時は、決闘者の王の座（デュエリストキング）を賭けて勝負だね。」

フッと笑うと、遊覇は茶化すでもなく、真剣に遊多へと告げた。

遊多は驚いた。目の前の人物は、同級生とは違い、自分の言葉を笑わず本気と受け止め、自分を対等の相手として見てくれた。

‥認められた。‥

その事が嬉しくて遊多は笑顔で頷いた。

「うん！」

遊多の返事を聞き、遊覇もまた、笑顔で遊多を見た。

今此処に、何れ交わるであろう好敵手（ライバル）の誕生した瞬間であった。

「ブハハハハ！」

しかし、そんな雰囲気をぶち壊す嫌な笑い声が公園に響き渡る。

「遊多ぁ〜！　お前が決闘者の王（デュエリストキング）に成れるわけ無えじゃねぇかよ！」

二人は声の方へと顔を向けた。

「あっ！？」

「…。」

驚きの声を上げる遊多。

其処にいたのは、先程遊多を脅し、カードを奪おうとした太（ふとし）であった。

「お前、本当に自分が決闘者の王(デュエリストキング)に成れると思ってんのか？　雑魚の癖によ！！」

太の言葉は、容易に遊多の心を抉った。

（やっぱりぼく何かじゃ、決闘者の王(デュエリストキング)には成れないんだ…。）

俯き、目尻に涙を溜め耐える遊多。

しかし太の言葉で既に、遊多の心はあと一歩で折れそうだった。

「だから、お前じゃ決闘者の王(デュエリストキング)にはなれ「何でそう言えるんだ。」」

あと少しで、完全に折れる所だった遊多の心を救ったのは、太の言葉を遮った遊覇の言葉だった。

「は？」

「何で決闘者の王(デュエリストキング)に成れない何て言えるんだ？」

遊覇は、静かでいて尚有無を言わせぬという雰囲気で太へと問いかけた。

その圧力(プレッシャー)に蹴落とされそうになる太。

「う、ウルセェ！？　雑魚に雑魚って言って何が悪ぃんだよ！！

遊多みたいな雑魚が決闘者の王(デュエリストキング)に成れるわけねぇだろ！！」

「デッキには無限の可能性がある。　ソレと同じで、決闘者(デュエリスト)にも同じだけの可能性があるんだ。」

遊覇から徐々に溢れ出る圧力（プレッシャー）。
その圧力（プレッシャー）は徐々に太を飲み込み始める。
「あわ！？　アワアワアワ！？」
遊覇の：覇気：が太を完全に飲み込み始め、ドサッと尻餅をつく太。
太の戦意は既に無く、完全に折れていた。。
「そんな彼の夢を奪う様なことを言う君を僕は許さない。」
太の精神が切れそうになったその時、公園の入り口から聞こえた声により、太の精神が保たれた。
「よう太。何時までも待たせんだよ？」
ソコに現れたのは、目の前に尻餅を着いている少年をそのまま大きくしたような少年だった。
「に、兄ちゃん！？」
太は歓喜した。
そうだ、自分には兄が居た。
兄ならこんな生意気な奴ボコボコにしてくれる！
先程まで折れ掛かっていた戦意が戻り、ニヤリと笑みを浮かべる。
「太ぃ～。　コイツかぁ？お前を虐めたって奴はぁ？」

太の兄と言う少年は、遊覇を見ると太に向かってそう言った。
「そうなんだよ兄ちゃん！？　コイツら、二人で俺をコケにしたんだ！　雑魚のくせに！！」
突然強気になり憤慨してみせる太。
その様子に、遊覇は若干呆れ太の兄を見た。
ゆっくりと近づいてくる太の兄。
「弟が世話になったんだってなぁ～？」
ドスを利かせた声で遊覇へと話し掛ける太兄。
しかし眉一つ動かさず遊覇は逆に睨み返した。
「勝手に転んだのはそっちでしょう？　それに先に苛めをしていたのはソコの彼だ。」
そう言って太を睨む遊覇。
しかし、兄が居るお陰がさっきまでの様に怯えたりはしなかった。
「なぁ兄ちゃん！？　やっちゃってよコイツ！？　ボッコボコにしてよ！」
太が騒ぎ立て、兄を煽る。
太は、自分に楯突いた目の前の少年を許せなかった。

今すぐにでも殴り倒し、自分の足元に跪けたかった。

自分が同級生にしている様に…。

「まぁ待てって。　こんなガキ相手にマジなんて可哀想だろ？」

太の兄はニヤリと笑い、弟の太を宥めた。

「何でだよ兄ちゃん！！　そんな奴らボコボコにしちまえば良いじゃんか！？」

太の兄は怒鳴る弟の方を向き、ゆっくりと口を開いた。

「まぁ落ち着け。　こんなガキ、ボコボコにするのは簡単だ。だが、それじゃつまらねぇだろ？　だからよ、ちょっとした遊びを考えたのよ。」

そう言って遊覇の方へと向き、太兄は面白そうに喋り始めた。

「弟が世話になったなぁ。　テメェみたいなガキボコるの分けねぇんだがよ。　俺は心が広いからよ、俺と決闘（デュエル）で勝負して、テメェが俺に勝ったら今回のこと無かったことにしてやっても良いぜ。」

何とも理不尽な条件を出してきた太兄。

ぶっちゃけとばっちりである。

「まさか、逃げねぇよな？　決闘者（デュエリスト）足る者、挑まれた勝負に背中は見せねぇだろ」

ニヤニヤと笑い遊覇に勝負を促す様に言う。
彼は、こうまで言えば遊覇が必ず勝負に乗ってくると確信していた。
「さぁどうする？　勿論戦るよなぁ～？　断ったらそこのお友達がどうなるか分からねぇぜ？」
そう言うと、遊覇の隣にいた遊多へと顔を向けた。
ニヤリと笑い遊多はビクッと体を震わす。
「分かった。その勝負、受けて立つ。」
遊覇は隣の遊多をチラリと見ると、決心し相手の勝負を承諾した。
太兄はニヤリと笑い上着の内側から自らのデッキを取り出す。
それに倣い遊覇も腰のホルダーからデッキを取り出す。
お互いに決闘盤（デュエルディスク）を腕に装着する。
ディスクの中央にあるデッキホルダーに自らの魂の結晶足るデッキをはめ込む。
電子音が鳴り、ディスクの中央から光が走る。
ソレと共にディスクの形状が変わり、決闘盤（デュエルディスク）としての完全な姿へと変形する。
二人はデッキからカードを五枚引き、構え合う。
そして二人は高らかに宣言する。

「「決闘(デュエル)!!」」

【遊覇編：二話】★（前書き）

久しぶりです

オリカ出ます

ネタカードでます

【遊覇編：二話】★

「先行は俺が貰うぜ！　ドロー！！」

太兄は怒声にも似た大声で、デッキからカードを一枚引き抜いた。

【太兄】

ＬＰ４０００

手札５→６

伏せカード０

「俺は、ブラッド・ヴォルスを手札から召喚！！」

手札６→５

太兄が手札のカードを決闘盤（デュエルディスク）にあるプレートの窪みにカードを設置する。

すると、何も無い空中に斧を持った禍々しい表情をした魔人が現れた。

ブラッド・ヴォルス

☆×４

属性：闇

種族：獣戦士族

悪行の限りを尽くし、それを喜びとしている魔獣人。手にした斧は常に血塗られている。

ＡＴＫ／１９００　ＤＥＦ／１２００

『グゥオォォォ！！』

斧を持ち上げ叫び声を上げる魔人（ブラッド・ヴォルス）。

「更に手札から、二重召喚（デュアルサモン）を発動！！　俺はこのターン、通常召喚を２回行える！！」

手札５→４

二重召喚（デュアルサモン）

通常魔法

このターン自分は通常召喚を２回まで行う事ができる。

「二重召喚（デュアルサモン）の効果で、更に手札から暗黒の狂犬（あんこくのマッドドック）を召喚！！」

再び手札のカードをプレートの窪みにはめ込む。

手札４→３

空中に、犬歯を剥き出しにし唸り声を上げる魔獣が呼び出された。

「俺はカードを２枚伏せてターンエンドだ！！」

暗黒の狂犬（あんこくのマッドドック）

☆×４

属性：闇

種族：獣族

かつては公園で遊ぶ普通の犬だったが、暗黒の力により凶暴化してしまった。

ＡＴＫ／１９００　ＤＥＦ／１４００

【太兄】

ＬＰ４０００

手札３→１

伏せカード２

「僕のターン。ドロー。」

静かに宣言しデッキトップからカードを一枚引き抜く。

【遊覇】

ＬＰ４０００

手札５→６

伏せカード０

「僕は、手札から増援を発動！

デッキからレベル４以下の戦士族モンスターを１枚手札に加える！」

遊覇はカードをディスクの側面にある溝にカードを差し込む。

手札６→５

増援

通常魔法

　自分のデッキからレベル４以下の戦士族モンスター一体を手札に加える。

遊覇は、決闘盤（デュエルディスク）の中央にセットしてあるホルダーからデッキを取り出し中を確認する。

「僕は、デッキからサイレント・ソードマンＬｖ０を手札に加える！」

カードを一枚加え再びデッキを切り直す。

手札５→６

「そして手札から、サイレント・ソードマンＬｖ０を攻撃表示で召喚。」

遊覇の場（フィールド）に兜を被った小さな剣士が現れた。

手札６→５

サイレント・ソードマンＬｖ０

☆×４

属性：光

種族：戦士族

サイレント・ソードマンが攻撃表示ならばターンごとにレベルを上げ５００ポイントずつ攻撃力がＵＰ（アップ）する。

ＡＴＫ１０００／　ＤＥＦ／１０００

「そんな雑魚モンスターで一体どうするつもりだ？」
太兄は見るからに弱そうな遊覇のモンスターに、バカにしたような感じに話しかける。
「僕はカードを1枚伏せてターンエンドだ。」

【遊覇】
ＬＰ４０００
手札５→４
伏せカード１枚

「俺のターン！ドロー！！」

【太兄】
ＬＰ４０００
手札１→２
伏せカード２枚

「俺は手札から強欲な壺を発動！　効果でデッキから2枚カードを

ドローする！」

強欲な壺

通常魔法

自分のデッキからカードを2枚ドローする。

太兄がデッキからカードを二枚引く。

手札2→3

引いたカードを確認するとニヤリと笑い遊覇を見る。

「お前死んだぜ！」

そう言うと、太兄は手札からモンスターを召喚した。

「俺は手札から、甲虫装甲騎士（インセクトナイト）を攻撃表示で召喚！！」

手札3→2

太兄のフィールドに鎧の様な外皮に覆われた、甲虫の騎士が呼び出された。

甲虫装甲騎士（インセクトナイト）

☆×4

属性：地

種族：昆虫族

昆虫戦士の中でも、エリート中のエリートのみが所属できるという「無死虫団」

の精鋭騎士。　彼らの高い戦闘能力は無視できない。

ＡＴＫ／１９００　ＤＥＦ／１５００

「バトルだ！！甲虫装甲騎士（インセクトナイト）で攻撃！　：甲虫斬‼　！！《こうちゅうざん》」

太兄の宣言に応えるように、甲虫装甲騎士（インセクトナイト）が、サイレント・ソードマンＬｖ０目掛けて斬りかかる。

「伏せ《リバース》カード、オープン！」

甲虫装甲騎士（インセクトナイト）の攻撃に合わせ、遊覇は伏せ《リバース》カードを発動させようとする。

「おっと！そうはさせねぇぜ！

伏せ《リバース》カードオープン！！王宮のお触れ。

コイツでテメェの罠（トラップ）カードは発動出来ねぇぜ！」

王宮のお触れ

永続罠

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、　このカード以外のフィールド上の罠カードの効果を無効にする。

「大方、トラップでモンスターを守ろうとしたんだろうが残念だったな！

テメェの罠（トラップ）は唯の紙くずだぜぇ！」

大きな音と共に周囲に煙が立ちこめる。

煙りに紛れて二体のモンスターの姿は見えない。

「サイレン・トソードマンＬｖ０　斬殺！」

サイレント・ソードマンＬｖ０の敗北を高らかに宣言した。

しかし、相手のＬＰが減っていないことにふと気づく。

煙りが晴れ、そこから現れたのは巨大な剣で甲虫装甲騎士（インセクトナイト）の斬撃を防いでいる、兜を被った青年の剣士だった。

「なっ！？」

太兄は驚愕する。

確かに、甲虫装甲騎士（インセクトナイト）はサイレント・ソードマンＬｖ０に攻撃を加

えた。

王宮のお触れを発動し、罠(トラップ)を使うことは出来ない筈だ。

しかし相手のＬＰは減っておらず、フィールド上には見慣れないモンスターがいる。

「残念だったね。　僕が発動したのは罠(トラップ)カードじゃない。　僕が発動したのは、速攻魔法時の飛躍〈ターンジャンプ〉！」

右腕を上げ、発動したカードを見せる。

時の飛躍ーターンジャンプ

速攻魔法

この魔法カードを発動した瞬間３ターン後のバトルフェイズに飛躍する。

「このカードは、モンスターを３ターン後のバトルフェイズへと飛ばす魔法カード。

　そして、サイレント・ソードマンＬｖ０は３ターンの時を経て、サイレント・ソードマンＬｖ３へ成長(レベルアップ)する！」

「何だと！？」

またも驚愕する太兄。

「バトルはまだ続行中だ！　サイレントソードマンＬｖ３の迎撃！！　沈黙の剣Ｌｖ３！」

サイレント・ソードマンＬｖ３が動き出す。

今まで防いでいた大剣で、甲虫装甲騎士（インセクトナイト）の剣を弾き、銅ががら空きになった甲虫装甲騎士（インセクトナイト）を袈裟懸けに斬る。

「グワァ～！！」

「甲虫装甲騎士（インセクトナイト）撃破！！」

斬られたモンスターが消滅し、遊覇がサイレント・ソードマンＬｖ３の勝利を宣言する。

【太兄】

ＬＰ４０００→ＬＰ３４００

「糞がぁ！！　良くもヤリヤガッタナァ！」

まさかの反撃に怒りを露わにする太兄。

「…決闘者（デュエリスト）は、何時如何なる時も冷静で有れ。　基本だよ？」

「な、何だとぉ～！！」

自分より下だと思っていた相手にしてやられ、さらには自分の状態

の事を指摘され顔を真っ赤にしながら逆上する太兄。

「ぜってー殺してやる！　このクソがぁ～！！」

遊覇はほくそ笑む。

相手をわざと挑発し、調子（ペース）を崩す。

決闘者（デュエル）とは何もカードだけの闘いではない。

如何に相手を此方のペースに引きずり込むか。

そう言った心理戦も決闘（デュエル）の一つの戦略なのだ。

「（上手い具合に挑発に乗ったな？　まあ、そう言うのも師匠に仕込まれてるからなぁ。）」

内心では苦笑しながら表情を崩さず対戦相手を見る。

「俺は、カードを1枚伏せてターンエンドだ！！」

【太兄】

ＬＰ３４００

手札１

伏せカード１枚

「僕のターン！ドロー！！」

【遊覇】

手札４→５

伏せカード０枚

「このターン、サイレント・ソードマンＬｖ３のレベルが上がる。」

サイレント・ソードマンＬｖ３→サイレント・ソードマンＬｖ４

「僕は、手札からレベル４モンスター、荊景学院の戦闘魔道士を守備表示で召喚！」

遊覇のフィールドに、馬に跨り鎧を着た魔道士が召喚された。

「荊景学院の戦闘魔道士のモンスター効果発動！

このカードの召喚成功時、自分フィールド上にいる戦士族の数だけ、フィールド上の魔法または罠〈トラップ〉カードを破壊することができる！

僕の場には、サイレント・ソードマンＬｖ４がいる。　よってフィールド上の魔法、罠〈トラップ〉カード１枚を破壊することが出来る！」

荊景学院の戦闘魔道士

☆×４

属性：闇

種族：魔法使い族

このカードの召喚成功時、以下の効果から一つを選ぶ。

●自分フィールド上の「魔法使い族」の数×２００ポイントのダメージを与えることができる。

●自分フィールド上の「戦士族」の数だけ、フィールド上の魔法または、罠カードを破壊する事ができる。

ＡＴＫ／１２００　ＤＥＦ／１４００

荊景学院の戦闘魔道士が左腕を上げる。

その腕に魔力が集まり、巨大な魔力の塊が出来上がる。

「対象は、その伏せカードだ！

やれ！荊景学院の戦闘魔道士！　：　破壊の雷：」

遊覇の宣言と共に上げられた左腕を振り下ろす。

放たれた魔力の塊は雷に変化し、一直線に伏せカードへと向かい、そのまま裏向きのカードへと突き刺さり爆発する。

「グォ！」

爆風に身を竦め顔を腕で覆う。

【太兄】

魔法・罠ゾーン２→１

「バトルだ！

サイレント・ソードマンＬｖ４でブラッド・ヴォルスに攻撃！

：沈黙の剣Ｌｖ４：！！」

遊覇の宣言でサイレント・ソードマンＬｖ４が告げられた敵へと狙いを定める。

そして、敵眼前まで飛び込み一刀のもとに斬り捨てた。

「ブラッド・ヴォルス撃破！」

【太兄】

ＬＰ３４００→２３００

「グワァ！」

ダメージで尻餅を突き倒れる太兄。

「僕はカードを1枚伏せて、ターンエンド。」

【遊覇】

LP4000

手札5→4

伏せカード1枚

「糞ォ！　俺のターン、ドロー！！」

【太兄】

LP2300

手札1→2

伏せカード1枚

苛ついていて顔を歪めていた太兄だったが、ドローしたカードを確認した途端に、いやらしい顔でニヤリと笑った。

「来たぜぇ！　俺は手札からならず者の傭兵部隊を召喚！」

手札２→１

太兄のフィールドに防具を着けた数人の屈強な男達が現れる。

ならず者の傭兵部隊

☆×４

属性：地

種族：戦士族

このカードをリリースして発動する。
フィールド上に存在するモンスター１体を破壊する。

ＡＴＫ１０００／　ＤＥＦ／１０００

「このカードはなぁ！　リリースする事でモンスター一体を破壊できる極悪カードよ！！」

そう言って、太兄はならず者の傭兵部隊の効果を発動した。

「ならずの効果発動だぁ。コイツの効果は優先権を使って先に発動するぜ。　対象は、サイレント・ソードマンＬＶ４だ！」

太兄の号令に、ならず者達は一斉にサイレント・ソードマンに飛びかかる。

サイレント・ソードマンは為す術もなく、ならず者達の手によって破壊された。

「サイレント・ソードマン撃破！」

太兄は喜悦の籠もった声でサイレント・ソードマンの破壊を告げた。

「俺はターンエンドだ！」

【太兄】

ＬＰ２３００

手札２→１

伏せカード１枚

「ボクのターン　ドロー！」

【遊覇】

ＬＰ４０００

手札４→５

伏せカード１枚

「僕は手札から、サイレント・ガンナーを攻撃表示で召喚！」

サイレント・ガンマンＬｖ０

☆×４

属性：光

種族：戦士族

自分のターンごとにサイレント・ガンマンが攻撃表示ならばターンごとにレベルを上げ５００ポイントずつ攻撃力がＵＰ（アップ）する。相手にレベル×１００ポイントダメージを与える。

ＡＴＫ／１０００　ＤＥＦ／１５００

遊覇の場に西部劇に出てきそうな姿をした小さな子供が現れた。

【遊覇】

ＬＰ４０００

手札５→４

伏せカード１枚

「バトルフェイズ！　荊景学院の戦闘魔導士の攻撃！　魔法剣一閃！」

魔導士が馬に乗って駆ける。

「ぐぁー」

【太兄】

ＬＰ２３００→１１００

伏せカード１枚

「続けて、サイレント・ガンマンの攻撃！　沈黙の弾丸Ｌｖ０」

サイレント・ガンマンの拳銃が火を噴きその弾丸が太兄を捉える。

【太兄】

ＬＰ１１００→１００

「うぎゃ！」

攻撃が当たり派手に倒れる太兄。

「ヒヒまだライフが１００残ったぜ　次のターンぶっ殺してやる！」

「いや、このターンで終わりさ：　更に伏せ《リバース》カードオープン！　リバースマジック援護射撃」

援護射撃

通常魔法

このターン自分のモンスターが全てダイレクトアタックに成功したらデッキからモンスターを一体場（フィールド）に特殊召喚出来る。

「援護射撃の効果により、デッキからモンスターを一体特殊召喚する　現れろ、ナイトセイバーＧＸ」

遊覇の声に導かれフィールドに西洋の鎧を身に着けた騎士型のモンスターが現れた。

ナイトセイバーＧＸ

☆×４

属性：光

種族：戦士族

？

ＡＴＫ／１８００　ＤＥＦ／１４００

【遊覇】

伏せカード１→０

「ナイトセイバーＧＸの追撃！　ナイトスラッシュ！」

ナイトセイバーＧＸの腕が振り上げられその手に持て剣が太兄に振り下ろされた。

「あわぁ！」

【太兄】

ＬＰ１００↓０

太兄のライフポイトが０になり二人の決闘に決着が着いた。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「くそーあんな決闘無効だ！」

「そうだ！どうせ何かイカサマしたんだろ！」

「見苦しいな　君達は負けたんだからあの子に謝りなよ・・」

心底あきれた様子にため息を吐く遊覇。

「うるせーぶっ飛ばす！」

逆上した太兄は遊覇目掛けて掴みかかった。

「くっ」

身構える遊覇。しかし次の瞬間太兄の動きが止まった。

「待ちな！　決闘に負けた腹いせに相手に手を出すなんざぁ決闘者の前に男として失格だぜ」

二人に声をかけた人物それは…

「あ、アンタは　本田ヒロト！」

声をかけた人物は伝説の決闘の王の仲間本田ヒロトであった。

「ここは俺の生まれた町だ　好き勝手な事はさせねぇ　消えな」

本田の言葉に二人は一目散に公園から出て行った。

「あの助けていただいてありがとうございました」

遊覇と遊多は頭を下げて感謝をした。

「気にすんな　たまたま通りかかっただけだからよ」

本田は似合わないウインクをして答えた。

「お前が遊戯の弟子って奴か」

「えっ僕のこと知ってるんですか？」

「あぁ何時もアイツの手紙に書いてあったぜ　自慢の弟子だってな」

本田の言葉に照れる遊覇。

「お前もバトルシティに参加するのか？」

「はい　そのために来ました」

「そうか、俺は決闘はわかんねーが応援してるぜ」

「ありがとうございます！」

「遊覇さん僕も応援してます！　頑張って下さい！」

「ありがとう遊多くん」

「だが、バトルシティはそう甘くはねーぞ　全国から多数の決闘者が集ってくんだ！　その中にはお前の知らないまだ見ぬ強敵がいるはずだ：　気ー抜くんじゃねーぞ」

「はい！」

本田からの激励に心が一層引き締まった気がした。

「良い返事だぜ　そういやアイツの弟子も参加するんだっけか？　もしかしたら会うかも知れねーな」

「えっ？」

「いやこっちの話しだ：　じゃあそろそろ行くわ　暇があったら応援しに行くわ」

「ありがとうございます！」

本田はそう言うと公園から歩き去っていった。

「（バトルシティ　僕の知らない強い決闘者が集まってくるまさに

戦場　僕は勝つ、勝ち続けて、そしていつの日か僕も師匠みたいな決闘者の王に…）」

本田の話を聞いた遊覇はまだ見ぬ強者の存在を思い描き心の中で誓うのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7077m/

遊戯王～受け継がれる光《イシ》～

2011年11月16日16時27分発行